國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕叶希著『ビジネス日本語における条件表現：日本語教育の観点から』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 湯浅, 彩央, Yuasa, Sao
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000507

〔書評〕

叶希著『ビジネス日本語における条件表現 ―日本語教育の観点から―』

湯浅彩央

本書は、ビジネス場面における順接条件表現（本書では「条件表現」）について、書きことば、話しことばの実態記述に基づいて論じたもので、平成三〇年度國學院大學大学院文学研究科に学位申請論文として提出された博士論文である。まず、近年のグローバル化に伴う日本企業における外国人人材の育成が求められる背景を述べ、習得の困難な文法項目である条件表現を「ビジネスの場面ではどのような場面でどのような条件表現を使うのかを分かりやすく学習者に提示することが非常に重要であり、条件表現がどのように使用されているかについて観察するという実態調査を行う必要があると思われる（一ページ）」という目的のもと、追究している。条件表現研究において、ビジネスジャパニーズを扱った研究として、本書は新たな視座を提供するものと思われる。

一　本書の構成

本書の構成は、以下のとおりである。なお、各節の下位構成は省略した。

序章　条件表現の従来の研究と本論の立場、1研究背景と目的、2先行研究と本論の視点、3本論における日本語条件表現の分類、4ビジネス場面における言語使用領域と本論の考察資料、5本論の構成

第1部　ビジネス文書における条件表現　第1章ビジネス文書における条件表現の使用状況

第2部　ビジネス会話における条件表現　第2章経済ドラマにおける条件表現の使用状況、第3章職場の自然談話録音における条件表現の使用状況、第4章ビジネス会話と職場の雑談における条件表現、第5章ビジネス日本語会話教科書における条件表現の使用状況

第3部　商法における条件表現　第6章商法における条件表現、第7章口語体「商法」と文語体「商法」における

条件表現
終章　結論と今後の課題

二　各部の内容と評言

序章で先行研究における条件表現を概括し、本書の立場を明らかにしたのち、以下「ビジネス文書」、「ビジネス会話」、「商法」における実態記述を行い、全体のまとめと課題を整理する。

以下、右のまとめごとに紹介しながら、いくらか感想を述べていく。なお、紙幅の都合から評者の関心の向いたところに集中してしまうことをお許しいただきたい。

序章では、まず、条件表現の研究史を概観し、有田節子氏、中島悦子氏、前田直子氏、益岡隆志氏、国立国語研究所らの研究が「と」「ば」「たら」「なら」の四形式の用法分類を主に前件と後件がどのような関連性をもつか、前件と後件の事実の成立関係との観点からなされてきたと指摘する。そして本書では、これらを参考に「発話時にすでに成立しているかどうか、一回的な関係であるか否かに注目（三ページ）」し、①慣用的用法、②前置き、③仮定条件、④一般条件、⑤事実条件の五つに分類する。ただし、その分類を説明する用例を増補する必要性を感じる。また、「『なければならない』のような当為表現を考察対象から除外（三ページ）」とあるが、①慣用的用法は、「なお、国語研究所（一九六四）で陳述的条件、前田（二〇〇九）で評価的用法として提示する直後に『いい』『だめだ』など、評価を表す語が続いたものをも『慣用的用法』とする（七ページ）」とあり、当為表現を除外する明確な理由が示されていない。当為表現も固定化された表現形式であり、慣用的用法に含まれよう。当為表現が特有の文法化を遂げた表現のために除外したのか、筆者の考えを示す必要があるだろう。

また、本書は、形態論と意味論が混在しているのではないかと感じた。先行研究のように形式から用法を見るのか、複文（前件・後件）の機能から分析を試みているのか、筆者の目的は後者であるはずだが、次章以降の分析は形式からアプローチしており、混在しているように思われる。

従来の条件表現研究は、形式のバリエーションを把握し、その後にそれぞれの意味用法を帰納することから始まる。しかし、この五分類と第1部以降で対象としている条件表現を構成する要素との関係が示されていないのではないかと思われる。最初に意味用法の枠組みを規定するならばその妥当性と有効性への言及がなされるべきではないだろうか。

第1部は、市販の一五冊のビジネス文書文例集における「と」「ば」「たら」「なら」の四形式を先の五分類別に整理している。そして、「ば」「たら」は多用されるのに対し、「と」「なら」の使用が稀少であること、①慣用的用法では、ビジネス文書特有の後件に「幸い・幸甚」と共起することが多いと指摘する。筆者は「ば」の使用数の高さを強調するが、表3の条件表現の用法別用例数と表8を比較すると、「と」は全用例、「たら」も六割が共起している。この結果を指摘した意義は評価できるが、各表の説明および考察が多用される二用法しか言及されておらず、用例掲載も少なく、さらなる説明が必要と感じた。また、仮定条件では、「『と』『ば』『たら』『なら』4形式の仮定条件の用法については、各形式と共起する文末表現を中心に分析を行う（一八ページ）」とあり、原沢（二〇一四）の「ムードの表現」、庵他（二〇〇〇）「話し手の気持ちを表す表現」を参考に筆者が設定している（表4「文末表現の定義と分類」一九ページ）。ここには、除外したはずの「なければならない・なければいけない」等の当為表現が含まれている。以下、表5～6の後件の文末表現には挙げられていないが、これは用例が存在しないのか、考察から除外しているため掲載していないのか不明である（表4の「義務必要」「勧め・忠告」「許可・許容」「禁止」もなし）。表を多用し細かく分析を試みているだけに、説明不足な点が惜しまれ、実態はどうであるのか知りたいところである。

第2部「ビジネス会話における条件表現」は、経済ドラマ（第2章）、職場の自然談話録音（第3章）、ビジネス会話と職場の雑談（第4章）、ビジネス日本語会話教科書（第5章）と話しことばにおける条件表現を考察している。第2章のドラマにおいては、社内・社外、話し手と聞き手の人間関係も考慮に入れた考察が興味深い。第4章では、ビジネス場面と職場の雑談での相違点に着目している。用例採取で「高校と大学の教員の発話を考察対象から除外した（八三ページ）」理由は、分析に大きな影響はないとしても、説明が必要であろう。用例から読み取れる現象を指摘するものの、その説明が全体的に不足している。加えて、先行研究の見解に即した用例を挙げるだけではなく、ビジネス会話特有の特徴をもう一歩深めてほしい。例えば、「と」「ば」「たら」がビジネス場面と雑談場面とで用いられる用法に違いがあり、「勧誘や提案などの場面が多い」と述べるが、場面（話題）差だけが要因とは考えにくく、前件・後件との関係性に着目し、論を深めてほしいと思う。

第3部は、商法および会社法における条件表現を考察している。商法は、一八九九（明治三二）年に制定され、一部

二〇〇五（平成一七）年に口語化されるものの、それ以外は文語体である。そのため、文語体・口語体における条件表現を整理している。ただし、第一部、第二部で扱っていた条件表現とは大きく異なり、「場合」系（「場合は」、「場合において」等）、「とき」系（「ときは」、「ときを除き」等）の対比が論の中心となる。筆者は「外国人が日本のビジネス社会で活躍するには、ビジネスに必要な日本語能力と（中略）特に企業に関する法である商法を学ぶことはきわめて重要であると考えられる（一二七ページ）」と述べ、評者もその見解には賛同するものの、なぜ「場合」系「とき」系の形式を条件表現の範疇で扱うかについては、なお手続きが必要と思われた。第二部までは「と」「ば」「たら」「なら」を扱ってきたので、それとどう整合性を取るのか、つまり「場合」系・「とき」系を条件表現のバリエーションの中に組み入れる理論的根拠がよく理解できず、本書の展開としては唐突な感じがする。また、ビジネス文書、ビジネス会話においてもこうした形式は使用されていると思われるがそれに関する言及が見られない。この点に関してもさらなる省察が必要と思う。

本書を通読しながら感じたことを、二点述べておきたい。

先述した条件表現の枠組み設定により客観的妥当性を確保するには、先行研究との関連を述べ、条件表現研究を広く把握する必要があろう。そのためには、本書の大部分は共時態を扱ったものであるが、日本語史の観点から指摘した阪倉篤義氏、小林賢次氏、矢島正浩氏の一連の研究を踏まえる必要がある。とりわけ、矢島（二〇一三）の研究手法は、本書で課題とした回答が得られよう。

さらに、本書の副題に「日本語教育の観点から」とあるが、本書はビジネス文書、ビジネス会話における実態記述に重点が置かれている。この次の段階に日本語教育において、ビジネス場面での条件表現の指導等、日本語教育を視点とした教育および研究が展開されるものと期待している。以上は、今後条件表現研究のみならず、ビジネスジャパニーズ研究を発展させる際に考慮いただければ幸いである。

（A5判、一八八頁、郵研社、二〇一八年十一月発行、四〇〇〇円＋税）

参考文献

小林賢次（二〇〇二）「順接の接続助詞「ト」再考―狂言台本にみる近代語条件表現の流れ―」『国語と国文学』七九―一一
阪倉篤義（一九九三）『日本語表現の流れ』岩波書店
矢島正浩（二〇一三）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院